論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨 お よ び 担 当 者

報告番号	※　　第　　号

氏　　名　伊藤　隆

論　文　題　目

日本語母語英語学習者の CMC 対称型クローズドタスクにおける目標言語習熟度の影響

論文審査担当者

主　査	名古屋大学	教授	木 下 徹
委員	名古屋大学	教授	藤 村 逸 子
委員	名古屋大学	教授	尾 関 修 治

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

Ⅰ．論文の概要と構成

外国語の教授・学習の場において、ペア活動を行う際、学習者の様々な特性のうち、どのような要因に着目し、どのような特性を持つ組み合わせを作れば最も適切なのかという問題は、語学教育のみならず、非常に広い適用範囲を有する問題の１つである。

その中で、本論考は、母語が日本語である大学レベルの英語学習者のペアが、「対称型クローズドタスク」と呼ばれる、学習者の双方が、必要な情報の一部をそれぞれ分け持ち、第３者の直接的関与はない状態で、課せられた問題解決を図るタイプの課題を、キーボードとモニターによる文字を介した Computer Mediated Communication (CMC) によって遂行するときに、パートナーと本人の目標言語（英語）の熟達度に差が存在する場合とない場合を比較することにより、その差の異同のパターンがもたらす影響を、主として、問題解決の成功の程度、産出される言語の量的特徴、およびタスク遂行に関する主観的動機づけという３つの視点から分析し、ひいては、学習者のペアの組み方についても教育実践の場における示唆を得ることを目指したものである。

本論考は、第１章の「背景と目的」から、第７章の「結論」までの章と、参考文献及び巻末資料から構成されている。

第１章では、このテーマに関する背景と目的を、タスクのカテゴリーとその定義、英語の習熟度をはじめとするタスクに影響を与える可能性がある主要な要因群、および外国語教育における CMC を中心として解説している。

第２章、３章では先行研究を検討している。まず、第２章はタスク遂行時の目標言語の熟達度の影響を、関連する研究の中でいわゆる「さきがけ」的なものから周辺的なものも含めて広く渉猟し、最後にこれまでの先行研究の限界を指摘している。続いて第３章では、主として交わされるコミュニケーションに対する評価基準に関するものに焦点を当て、Complexity, Accuracy, Fluency (CAF)を主要な観点とした研究を中心に検討している。

第４章、第５章は、方法論と結果を報告している。本論考では、実験計画を２分して、第４章では、188 名の実験参加者を、熟達度の違いで、相対的上位群と下位群の２つのグループに分け両群からのデータを比較する実験者間計画とし、また第５章では１回目と２回目でパートナーのレベルに異同がある場合の同一被験者からのデータの比較を行う被験者内計画とし、それぞれの章ごとに、実験参加者の背景、課題、測定手段、データ収集手順、データ解析方法等を記述した後、結果を報告している。さらに５章の後半では、結果を学習者ペアの熟達度からみたパターン別にまとめている。この中で、主な知見の一つとして、目標言語熟達度が比較的高い学習者と低い学習者が組んだ場合、低い学習者だけでなく高い方も、総じて産出語数や The Analysis of Speech Unit (AS Unit) の語数、さらには、タスクの達成度のもっとも直接的な指標である問題解決数といった観点において、同程度のパートナーを相手にした場合より相対的に増加する傾向が見られたとしている。他方、語彙の複雑性については、測定に使用した Malvern & Richards (1997)の *D* の数値で見る限り、組み合わせのパターンに関係なくほぼ一定であり、習熟度の差の影響はあまり見られなかったとしている。

第６章は、その前の２つの章で報告した結果について考察を加えている。その中で、熟達度の異なるパートナーを相手にした際の言語的産出量の増加については、下位者にとっては上位者による直

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

接・間接の支援による意思疎通の円滑化等の効果を、また上位者にとってはより丁寧な説明の必要性とタスク遂行時の主導性の自覚等の効果を、それぞれ可能性のある要因として示唆している。

最後に結章である第７章は研究全体を総括している。

II.　評価

本論考は、以下のような点で積極的な評価に値する。

（１）　目標としている能力や技能に、その時点で既にある程度差がある学習者をペアで活動させる場合、どのように組み合わせることが望ましいかという、ある意味、極めて広い適用範囲を有する問題に関して、第２言語学習の場における、対称型クローズドタスクを、ＣＭＣによる文字チャットにより遂行する場合という、相当限定的な条件設定はしているが、その分種々の教育実践の場での制約の中で、訓練効果等の影響の相殺をはじめとして、可能な限りの統制を施した、綿密な実験計画を立案し遂行することで、一定の解答を見出している。

（２）　（１）に関連して、組みあわせの影響を、客観的な言語産出量と、モーティベーションを中心とした主観的な面における効果という多元的視点から評価している。さらに、産出された言語の分析も単なる総語数だけではなく、AS unit あたり語数や、交換されるメッセージの量、さらには問題解決数と語数の関係にまで踏み込んで、産出言語の流暢性や効率性といった点からの、より詳しい分析を行っている。同様に、情意面での分析も、単に動機づけ一般の変動というだけでなく、より詳細に、期待、価値、意図、の３点に分けて、パートナーの習熟度のレベルの異同の影響を論じている。

（３）　下位者が上位者と組んだ場合、下位者のパーフォーマンスが多くの点において向上するというのはヴィゴツキー理論のスキャフォルディングの概念からみても、概ね妥当と思われる。さらに、上位者にとっても、言語的産出量のみならず、問題解決数自体も向上する（すくなくとも、同等の相手と組んだ場合と遜色ない）という報告は、調査方法がかなり堅牢であるだけに、信頼できる興味深い事象であるだけでなく、教育の現場における協働学習の理論や実践にも、貢献しうる知見である。

（４）　全体として、文字型 CMC の特徴を有効に利用している。具体的には、１つには、対面の会話を文字化したデータによる分析の場合と比較して、交換されたメッセージの中に占める非言語情報の重みを極めて低く抑えることにより、タスクの遂行に関して、文字化された情報の影響が大きいことを保証している。また、対面と比較して、特に、習熟度の相対的下位者にしばしば見られがちな羞恥心や不安感からの自己抑制が少なく、その分、より活発な発話の導出にも成功している。

他方、本研究は、以下のような、改善すべき点も有している。

（１）　本研究で、動機づけを中心とした主観的・情意的側面を測定するための主な測定手段として用いた質問紙は磯田(2008)に依拠しているが、基盤となっている期待・価値理論と比較して、もう一つの活動・制御理論に関する説明と考察が相対的にやや不十分である。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

（２） 本研究の知見は、設定された目標言語熟達度からみた相対的上位群と下位群の相互交渉においては一定程度の適切性を有することは認められるが、本研究において想定された大学レベルの日本語母語英語学習者という母集団全体の中では、本研究の想定レンジを超える差が存在すると思われる。そのようなより大きな落差のあるペアにおける今回の知見の有効性については、さらなる研究により適用限界を見極める必要がある。

（３） 本論考で使用された、テキスト型 CMC によるチャットに付随する問題として、パートナーの発話を利用する分も含めた自己修正の度合いが結果に影響を与え、かつ、その要因と個人差の相互作用も存在する可能性がある。

（４） 産出言語に関する考察で、流暢性については、特に論文の前半で、基本的に、産出量とほぼ等しいとみなしているように読める記述がある。しかし、熟達度が上がると、より簡潔で的確な表現の使用できる可能性もあるので、産出量のみで流暢性を議論するのは不適切なケースもありうる。

（５） 本論考の中でもある程度意識されているように、今回の知見は、ゴールが明確に意識できる「対称型クローズドタスク」というタスクの特性にも影響されている可能性があり、タスクの特性の違いによる影響も今後検証されることが望ましい。

（６） 熟達度の相対的下位者と上位者が組んだ場合の比較的良好なパーフォーマンスについて、上位者の何が下位者にとって有効な助力として機能したかについて、さらに踏み込んだ分析がされることが望まれる。

（７） 実験参加者の産出した生のデータは、最終版では３か所ほど示されているが、差支えのない範囲で、もう少し多く示せれば、今回、交わされたコミュニケーションの実態について一層豊かなイメージを描きうる。

ただし、以上の諸点は、いずれも、今後、望まれる改善点ないしは、本論考の知見の一般化の限界に関する問題であり、本論考自体の価値を大きく損なうものではない。

III. 結論

以上のような評価に基づき本論考は博士（学術）の学位を授与するのに十分な水準に達していると判定する。